

大浦ごぼう再考

大浦ごぼうを歩く

今年も12月2日に大浦地区の4軒で栽培された「大浦ごぼう」が成田山新勝寺へ納められ、参拝者へ精進料理として振る舞われるといます。

いつものような経緯で新勝寺に納められることになったのか、改めて考えてみました。

1966(昭和41)年に大浦ごぼうは天然記念物として市の文化財に指定されました。同43年発行の『新修成田山史』には「江戸時代から当山の為めにのみ栽培してきた名物」で、元禄年間(1688~1704年)に佐

倉城主に奉納した他、江戸奉行所、諸大名、講中などに献上したとあります。



新勝寺からの感謝状

想像をふくらませると、新勝寺と大浦ごぼうを結んだのは成田山中興第1世照範上人ではないかと考えます。1700年に新勝寺住職となった上人は当時、八日市場村見徳寺住職と深いつながりがあり、この関係が大浦ごぼうを新勝寺にもたらしたのでは、と考えたくなります。

新勝寺からの献上品として江戸市中でも知られるようになり、1735(享保20)年発行の菊岡沾涼の地誌『続江戸砂子』に「大浦牛蒡」が掲載されましたが、当初は日蓮宗飯高檀林所在地の「飯高牛蒡」と記載されました。後に「大浦牛蒡下総、江戸より20里。越後弘智法印出生の地なり」と修正されました。

1970年代から大浦ごぼうに関心を持ってきた筆者ですが、「ごぼうの栽培に成功した大浦の名主を通じて徳川家に献上された」話や、1921年刊行の『匠瑳郡誌』に記載の「大浦の鈴木四郎兵衛がごみ捨て場でごぼうを見つけた」伝承はこれまで確認できませんでした。また、「新潟県海霊寺に100本納めた」とされるのは、弘智法印ゆかりの西生寺のことでしょう。

ごぼうを集積する椎名家に新勝寺貫首から贈られた3枚の「感謝状」を目にした時、改めて300年を超えて大浦ごぼうを栽培する人たちの誇りのようなものを感じました。

(市文化財審議会委員・依知川雅一)

■ 秘書課 広報広聴班 ☎ 73・0080